

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25511013

研究課題名(和文) 茶文化の総合的研究 茶論・絵画・女性を中軸として

研究課題名(英文) A Study on Tea Drinking Culture through three pivotal aspects: Early Books on Tea, Conversation Pieces and Women

研究代表者

滝口 明子 (Takiguchi, Akiko)

大東文化大学・国際関係学部・教授

研究者番号：20179576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：欧米茶文化形成過程を以下の三視座から総合的に研究した。(1) 欧米茶書の系譜(2) 日常生活における茶の実態や意味(絵画と詩文学・思想書に見られる茶の表象と表現)(3) 日本・中国・アジア諸地域との茶文化比較(女性とコミュニケーションの視点を含む)
イギリス、オランダ、スイスにおいて現地調査を行い、研究者との国際交流を図り、図書館や美術館・博物館で貴重な一次資料を発見した。文献・絵画資料の整理・読解・分析を通して17~18世紀欧米における茶文化形成過程を実証的かつ多面的に解明した。今後の課題は日本やアジアの茶文化との比較研究を進め、欧米茶文化の特質と近代世界文化への影響について考察を深めることである。

研究成果の概要(英文)：This is a study on Tea Drinking culture in Europe from 1610 to 1800. The research project was carried out through the following three pivotal aspects:(1) Early European Books on Tea ; (2) The reality and the meaning of Tea in daily life (the representations and the expressions of Tea in Art and Literature) ; (3) Comparative studies (Tea in Japan, China and other Asian countries)
Overseas fieldwork in England, Scotland, Holland and Switzerland made it possible for the author not only to communicate with the European scholars and researchers but also to discover the importance of several unknown documents and tea-things, including Delft blue plate with a tea-sipping lady around 1700.

研究分野：人文学 文化学 比較文化史

キーワード：茶文化 文化学 比較文化史 茶論 女性 コミュニケーション 喫茶図 茶道具

1. 研究開始当初の背景

(1) ヨーロッパにおける茶の受容と定着、そして独自の茶文化創造過程は、これまで欧米でも国内でもほとんど学問的研究がなされてこなかった分野である。筆者はこの分野の基礎構築をライフワークと考え、研究を続けて来た。『英国紅茶論争』(1996: 講談社選書メチエ)では多様な資料を駆使して18世紀イギリスにおける茶の受容と拒絶反応、普及・定着過程を綿密にたどった。『茶の博物誌』(2002: 講談社学術文庫)は、西インド諸島に生まれ、ロンドンで活躍した医師J.C. レットサムによる茶論(1772, 1799)の翻訳で、詳細な伝記と解説を付した。またイギリスだけでなくオランダ、ドイツ、フランスなどの重要な茶論発掘とその系統的研究の必要性を痛感し、プレニー、パウリ、ボンテクーの茶論に関する論文を執筆するとともに、茶論や茶詩等22文書を含む『茶の文化史: 英国初期文献集成』(2004: コーリカプレス)を編集し解説を担当した。

(2) 一方、筆者は1996年以降、茶の湯文化学会、国際O-CHA学会、茶学の会、日本紅茶協会をはじめ、さまざまな社会人公開講座(国際交流基金アジア理解講座、静岡県お茶知識人養成講座、朝日カルチャーセンター等)をとおして、多方面の茶の研究者や専門家と知り合う機会を得た。発表や招待講演では、例証として絵画資料を用いるようになり、しだいに絵画に描かれた茶道具や人々の表情と所作に、大きな興味・関心を抱くようになった。茶は「道具」を通して日常生活の中に美と潤いをもたらすものである。そのため、主に17世紀オランダ、18世紀イギリス、フランスの日常画(風俗画)で喫茶と茶道具を描いた絵画の収集を続けてきた。科研費を得られれば、十分な時間をかけて海外調査を行うことも可能になり、文献資料の収集とともに、現地の博物館、美術館を訪ねて実物を見た上で、さらに詳細な実証的研究を推進できると考えた。

(3) 茶の歴史に関する資料集や研究書が出るなど、欧米の学界も動き始めており、日本人としての視点を活かしながら、茶文化の総合的研究を進めることこそ急務と考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、欧米における茶文化の形成とその展開を総合的に研究し、茶の文化学の基礎を構築することにある。

(1) 欧米茶書の系統的研究(個別史料の読解と再検討): 17-18世紀ヨーロッパの重要な茶論を系統的に研究する。個々の茶論の内容を把握し、茶論相互の影響関係、差異と共通点を解明する。茶論の研究により、茶というアジアからの新しい飲み物がどのように捉えられているか、つまり茶に対するヨーロッパ人の見方や態度を明らかにする。茶論の中には茶という「アジアの葉」に対する見方だけでなく、ヨーロッパ人のアジア文明全体

に対する認識や世界観、価値観、日常生活に対する考え方、医薬・宗教思想などが映し出されている。その深みまで光を当て解明することをめざす。

(2) 日常生活における茶の実態や茶の意味に関する研究(絵画と詩文学・思想書に見られる茶の表象と表現): 日常生活の中での茶の意味や位置を解明するために、主に絵画と工芸美術、詩文学と思想書の中から茶の表象と表現を取り出し、その意味について考察し全体の中に位置づける。まず絵画や詩句の実例を集めることから始める。

(3) 日本や中国ならびにアジア諸地域の茶文化との比較研究: 照葉樹林文化の代表的植物である茶の利用の歴史に関しては、内外の研究の蓄積がある。その成果を踏まえ、比較研究により、欧米の茶文化の特質を明らかにする。また筆者が科研費を得て行った18世紀女性論研究の成果を活かして、女性とコミュニケーションの面からも、東西の茶文化を比較する。

3. 研究の方法

本研究では、三つの中心課題(茶論、絵画と茶道具、女性とコミュニケーション)について計画を立て、並行して進めた。異なる角度から茶にアプローチすることで、立体的総合的な研究が可能になるだけでなく、支障や遅れが出た時も柔軟な対応が可能となった。特色としては、次の3点が挙げられる。

(1) 古典的な文献読解を基本とし、「ことば」を通じた内面からの文化理解と絵画や道具など「もの」を通じた文化理解の両立を図った。日本語、英語、フランス語、ドイツ語の資料を利用した。文献の精密な理解とともに、実物を見て味わう体験的理解と直観を重視した。(実証性)

(2) 科学・医薬思想史、美術工芸史、女性史、コミュニケーション史などの分野の優れた研究から積極的に多様な方法を学ぶよう努力した。(領域横断的、学際的)

(3) イギリス、オランダ、スイスにおける海外調査を通して、文献・絵画・茶道具に関する資料収集を行うとともに、ヨーロッパ在住の研究者との学术交流を開始した。(比較文化、国際文化交流)

4. 研究成果

(1) 茶論に関する研究

茶論に関する主要な研究成果は、以下の3項目にまとめられる。

ヨーハン・ニコラス・ペクリン(Johann Nicolas Pechlin, 1644-1706)に関する新しい知見が得られた。ペクリンはオランダ、ライデン出身の医学者で、ドイツや北欧で活躍した。ペクリンとその茶論に関しては、日本ではこれまでほとんど知られることがなかった。本研究の海外調査により、その著書Potu theae dialogus(1684)ならびに英訳(1750)の写しを入手することができた。こ

れはヨーロッパで最も古い茶論の一つであり、以後の欧米茶書に多大な影響を及ぼしたものとされている。例えば、デュフルとスポンの茶論（フランス 1685）やオーヴィントンの茶論（イギリス 1699）にもペクリンの茶論に関する引用や言及が見られる。今後、さらに読解を進め、日本語で内容を紹介し、他の茶論と比較して、影響関係についても考察したいと考えている。

ヤコブ・スポン（Jacob Spon, 1647-1685）に関する新しい知見が得られた。『コーヒー・茶・ココア論』（1685）はフランス語で書かれ、当時のヨーロッパで学者のみならず一般読者に広く読まれた。この書物の著者としてデュフルだけでなく、スポンの名が挙げられることはあったものの、スポンがどのような人物だったか、またデュフルとの関係などについて、茶史の面からの詳細な研究はこれまで皆無に近かった。本研究により、以下のような点が明らかになった。ヤコブ・スポンの父シャルルはドイツ、ウルムからリヨンに移住した新教徒で、名医として人望厚い人物だった。息子のヤコブもリヨンで医師となったが、考古学に興味を示し、ギリシア旅行記やジュネーブの歴史に関する著作がある。1685年、ナントの勅令廃止直前に友人のデュフルとともにフランスからスイスへ逃れ、その地でまもなく病没した。スポンの茶書の特徴は、ヨーロッパへ伝わった新しい飲み物である茶・コーヒー・ココアを、医薬品・嗜好品として論じ、その本質を捉えつつ、日常生活での用い方も含めて一般の人々にもわかりやすく解説した点にある。これらの飲み物と宗教（カトリック、プロテスタント、イスラーム教、禅仏教等）との関連は重要なテーマであり、フランスのプロテスタント（ユグノー）であった医者スポンと商人デュフルの事例をとおして、研究を継続したいと考えている。

茶論の著者であるオーヴィントン、ケンペル、レットサムに関する新しい知見を得ることができた。

オーヴィントンに関しては、イギリスとオランダにおいて、『茶論』『スーラトへの航海』の数種の版本（大英図書館、ライデン大学図書館）を見ることができた。オーヴィントンの茶論は、イギリスの最も早い時期の優れた茶論で、短いが簡潔に良く整理されたものである。著者はイギリス東インド会社付きの聖職者として1689年から約2年間インドのスーラトに滞在した。『茶論』（1699）は、インドでの見聞も踏まえて、当時イギリスで人気が高まりつつあったアジアの飲み物、茶について紹介した本である。詳細は近日中に論文にまとめ、『東洋研究』に掲載予定である。ケンペルに関しては、『日本誌』の英訳者シヨイヒツァー関連書簡等（スローン文書：大英図書館）を見ることができた。スローン卿の秘書として、ケンペルの草稿の英訳を任されたスイス出身のシヨイヒツァーは、『日本

誌』の刊行後間もなく、若くして亡くなった。その後のヨーロッパにおける『日本誌』の影響力の重大さを鑑みれば、この翻訳者の果たした仕事や生涯はもっと注目されて良いものと考えられる。

レットサムに関しては、未公刊のレットサム関連書簡（フレンズ・ハウス図書館）ならびにラテン語で茶を論じた博士論文（ライデン大学図書館）を見ることができた。またライデン大学教授の一人に宛てたレットサムの手紙も偶然発見し、写真撮影することができた。同教授宛の手紙はほとんど手書きのものであるのに対し、レットサムからの手紙はタイプで打たれていた。当時の学者間の「手紙」による学术交流や機械としてのタイプライターの導入などについても考えさせられた。

(2) 喫茶図と茶道具に関する研究

絵画や茶道具に関する主要な研究成果は以下の三側面にまとめられる。『お茶を愉しむ～絵画でたどるヨーロッパ茶文化』も参照。

オランダのデルフト焼き絵皿に関する新しい知見を得ることができた。この絵皿はオランダ、ヘメーンテ美術館所蔵のもので、茶を飲む女性と茶道具、テーブルや暖炉などが描かれ、下部に短詩が添えられている。正確な製作年代はまだ特定されていないが、一説には1700年頃のものという。茶の流行初期のオランダの喫茶風習を伝える非常に重要な物的証拠と言える。今回の調査により、この絵皿は上部に2カ所穴があり、周囲に金色の補修の跡があることがわかった。所有者などについては資料がなかったが、室内に吊るして壁面装飾として用いられていた絵皿と推定できた。絵の細部に関して、女性の背景に二幅の絵が掛けてあること、右端の暖炉には火掻き棒なども描かれていることなどが新たに観察できた。オランダ文化史・生活史の専門家の協力も仰ぎつつ、この絵皿に描かれた情景の意味や時代との関わりについて、探究を続けたいと考える。

オランダ17世紀日常画（風俗画）の研究をとおして、喫茶風習がオランダ市民の日常生活に一般化する時期は、従来想定されている時期よりも遅く、17世紀末に近いことが確認できた。オランダ東インド会社は17世紀初頭、1610年に日本茶と中国茶を輸入開始した。輸入量の増加が目立つようになるのは17世紀半ばであり、しかも輸入した茶の大半はフランスその他のヨーロッパ諸国へ再輸出されていた。今回の調査により、日常画（風俗画）の面からも、茶は17世紀後半オランダの市民生活にまだそれほど普及していなかったことを確認した。例えば、裕福な市民家庭の家族肖像画などにも、豊かさを象徴するものとして西インド・東インドからの土産（貝、果物、織物、陶磁器等）が描かれているにもかかわらず、茶道具や喫茶風景を描いた絵は皆無であった。それほど豊かでない階層の日常生活を描いた絵画には、鍋ひとつを囲む家族の食事風景（食前の祈り）などはあ

っても、喫茶図は無く、当時の民衆の食文化に、異国からの奢侈品である茶が入り込む余地はなかったことが窺えた。またオランダの野外博物館で民家や醸造所、家畜小屋等の建築物と生活道具ならびに茶道具の見学を行い、オランダ日常生活史の体験的理解を深めることができた。18世紀以降の民家には茶道具の展示もあり、台所のタイル装飾や寒い寝室の中で暖を取る工夫など、実物を通してオランダ独自の生活文化を知ることができた。

イギリスにおける貴族の館と茶道具の見学をとおして新しい知見が得られた。ハム・ハウスは王政復古期の貴族の館で、初期の茶の流行のきっかけとなったポルトガル出身のキャサリン王妃やチャールズ二世もしばしばここを訪れたとされている。イギリスの喫茶文化の一つの原点とも言える場所である。所蔵のティーポットや「茶の小部屋」「王妃の休息所」「男性客間」、庭園等を見学した。漆塗りの家具や屏風など日本・中国の物産と思われるものが数多く残されており、喫茶の流行は単独のものでなく、日本趣味、中国趣味など東洋の文化に対する強い憧憬の念が背景にあったことを実感した。ティーポットの大きさは、予想よりも大きく、館の女主人の茶に対する愛好ぶりを示すものと考えた。ヴィクトリア&アルバート美術館での茶道具・家具の見学をとおして、これまで文献により想定していた17、18世紀の茶道具の形状や大きさ、色と質感を確認できた。中国や日本、東南アジア諸国の窯のものと、それらを真似て、ヨーロッパでの陶磁器生産が興ってくる時期のものが特に興味深く思われる。工芸美術史の成果を学びつつ、ヨーロッパ文化形成に与えたアジアの影響について、さらに考察を続けたい。

(3) 茶文化比較ならびに女性とコミュニケーションに関する研究成果としては、次の二点が重要であった。

日本の茶文化とイギリスの茶文化の比較。食文化の発達との関連において、茶の果たした役割に共通性があると考えた。谷晃先生(日本文化史・茶道史)の著作や講義をとおして「日本料理は茶懐石とともに発展してきた」ことを知った。イギリスの場合も、茶文化の発達とともに、独自の朝食や午後のお茶の料理・菓子類が生み出され、イタリアやフランスなどに比べて評価の低かったイギリスの食文化にも誇るべき伝統が創造された。日英両国において喫茶文化の発展がもたらした食文化の成長は、比較文化史の観点からも、非常に興味深い現象であると言える。

女性とコミュニケーションの問題に関しては、ジュネーブのヴォルテール博物館において、18世紀のサロンの雰囲気を残す部屋を見学した。また同時代のジュネーブ出身の画家J. E. リオタールの作品(主にパステル画)を見学した。この画家は、ヨーロッパ諸国並びにトルコを旅行し、多くの肖像画を残している。また茶、コーヒー、ココアにまつ

わる絵も描いている。イギリスの歴史家ギボンとも関わりのあったスイス人女性の肖像画も残している。画家自身の著作や手紙の他に、モデルとなった女性たちの日記や手紙なども手がかりとして、この時代の女性たちの生活と茶の関わりをさらに追求したい。

(4) 今後の展望

数度に渡る海外調査により、さまざまな文献・図像データを収集することができた。今後それらを整理し、データベース化を図るとともに、資料の読解・分析ならびに考察を続け、新たな知見を論文や著書としてまとめ、順次公表して行きたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔博士論文〕(計 1件)

滝口明子、欧米茶書の比較文化史的研究—イギリス茶文化の形成と紅茶論争、2014、342

〔雑誌論文〕(計 1件)

滝口明子、ボンテクー『茶論』の文化史的意義について、女性研究者による茶文化研究論文集、査読有、2013、115-129

〔学会発表〕(計 1件)

滝口明子、「ボンテクー『茶論』の文化史的意義について」茶の湯文化学会ならびに茶学の会主催、世界お茶祭り協賛行事「女性研究者による茶文化研究発表会」、2013年5月4日、「静岡県男女協同参画センターあざれあ」(静岡県・静岡市)

〔図書〕(計 2件)

滝口明子、大森正司 他、朝倉書店、茶の事典、2016、450(75-86, 87-100, 165-175) 刊行準備中

滝口明子、大東文化大学東洋研究所、お茶を愉しむ～絵画でたどるヨーロッパ茶文化、2015、244

〔その他〕

滝口明子、ポターさんとお茶、大東文化大学ピアトリクス・ポター資料館 NEWSLETTER、Vol.11、2015年12月

『西日本新聞』記事、2015年3月18日、「お茶の間学Ⅰ：和食力～茶料理もてなしの心」(執筆：藤崎眞二)内容：野村美術館館長、谷晃先生による茶と懐石料理研究会の紹介。参加者：大東文化大学大学院アジア地域研究科留学生および「茶と食の文化学」担当・滝口明子

社会人公開講座 滝口明子、お茶を愉しむ、大東文化大学オープンカレッジ、計5回、2013年5月11日、6月1日、15日、29日、7月6日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

滝口 明子 (Akiko Takiguchi)

大東文化大学・国際関係学部・教授

研究者番号：20179576